

「あなたには辞めてもらいます。今日、いまこの瞬間から」男は革張りの椅子に深くすわり、机のむこうに立っている女に言った。「理由はわかっているね」

怒りを押し殺したような、低い声だった。

女は黙って男を見返していた。その顔はまったくの無表情で、反省している様子も、反発している様子もなかった。

「あなたも知っての通り、裏のアパートに住んでいる松永さんのお嬢さんは、うちの息子の同級生です。松永さんの住む四階からは、うちの庭とリビングがよく見えるのだそうです。あの日、私と妻の留守中にここで何が起こったのか、松永さんの奥さんはそれを見ていて、きのう私に知らせてくれたのです。なんのことだか、心当たりがあるでしょう」

男は恨みのこもった眼差しで女を見た。

女は、「はい」とも「いいえ」とも答えない。

「松永さんは、息子が夕方まで庭で水遊びしているのを見たそうだと。曇り空でそんなに気温は高くはないのに大丈夫かしらと、心配してくださったそうだよ。ビニールプールを自分で庭に出して水をはることは、まだ息子にはできない。つまり、あなたがそうしたんだ。それだけではない。そのあと、真夜中ちかくまでリビングに明かりがついていた。中にはビデオゲームをしている息子の姿が見えたとおっしゃっている。しかも窓を開けっぱなしだったそうだと。翌日、息子は肺炎で入院した。私と妻が出張先から駆けつけた時、あなたは水遊びとゲームをさせていたことを黙っていた。それは多少なりともやましい気持ちがあったからでしょう。それはあなたが、本当は息子の肺炎が自分の不注意のせいだとわかっている証拠だ」

話しながら、机のうえに置いたふたつの拳が硬くなっていく。体中に管を取りつけられた我が子の姿が目に見え、男は体が熱くなった。

「息子が一命を取り留めたからよかったですよ。息子が喘息をもっていることは知っています。気管支が弱くて、過去に入院を繰り返していることも。あなたの採用を決めた時、くれぐれも風邪をひかせないように気をつけてくれと、くどいほど念をおしたはずですよ。それなのにあなたは……」

男は言葉を切って、反論を待った。

女はうすく目をとじて、かたくなに鉄面皮をくずさなかった。

感情を表に出さないことで、自分の心を必死に守ろうとしているのかもしれない。きっとそうにちがいないと男は思った。自分の落ち度で子供がひとり死にかけたのだ。人間の心があれば、何も感じずにいられるわけではない。

男は体の力を抜いてため息をついた。

住み込みの家政婦として採用してから半年。仕事ぶりは完璧だと妻から聞かされていた。仕事で多忙な男は家にいる時間もすくなく、彼女と接する時間は短かった。しかし口数が少なく黙々と仕事をする姿に、男はどちらかといえば好感を持っていた。息子も彼女には懐いているようだった。

プールやゲームをせがんだのが息子の方だということは、男もわかっていた。日頃きび

しく躑けているので、両親がいない隙にワガママをぶつけたのだろう。しかし彼女は子守りの責任として、当然そのようなワガママをきいてはいけなかったのだ。

妻はいま、妊娠八ヶ月の大事な時期だ。彼女にとってはじめての子供である。そのような時に、万が一息子が死ぬなどということが起きれば、それ以上の悲劇が重なってしまった可能性もあった。それを思うと、たとえ妻の遠縁の者だとしても、男はともこの女を許す気にはなれない。

「妻もなあなたを雇ったことを後悔していることだろう。あなたは家政婦としても、子守としても、失格です。いまずぐ荷物をまとめて出て行ってください」

「わかりました」

「最後に、なにか言うことはありませんか」

「なにもございません。旦那様にどのように非難されても、しかたのないことだと思っております」

「悪いが、退職金はわたせないよ」

「結構です。もう頂戴していますから」

「……なんだって？」

男が眉をひそめると、女はすこしだけ早口になって、

「いえ、短いあいだでしたが大変よくしていただいて、それだけでも十分もったいないということを申し上げました。……では他に何もなければ、これから荷物をまとめてまいりますので」

女はきびすを返して、ドアの方へ歩いて行った。

「信頼できる人だと思っていた。こんなことになって、本当に残念だ」

半分ひとり言のように、男がつぶやいた。

女は足をとめて振り返り、

「奥様にお伝えください。失敗をして申し訳ございませんでした。もう二度と姿は見せませんのでご安心ください、と」

女の頬にはじめて感情がわいた。こらえきれずに浮かんだ、かすかな笑みだった。

しかし男は顔をそむけていて、そのことには気がつかなかった。

* * * * *

「ここは広いからお掃除が大変だと思うけど、家政婦としての仕事だけではなく、あなたには息子の面倒をみてほしいの。夫はうちをあげることが多いので、わたしが出産の準備で入院してしまうと息子がひとりになってしまうから」

「ご安心ください。紹介所の方からも、そのように承っております」

「我が家は放任主義なのよ。ゲームでもなんでも、なるべく息子がしたいようにさせてあげてちょうだい。継母はいじわるだなんて思われたくないの。ビニールのプールは物置の中にあります。水遊びをさせるなら、昼間は日差しが強いから、夕方すずしくなってきたらにして。それから息子は気管支が弱くって、なるべく新鮮な空気をすわせるようにしたいの。これから肌寒くなるけれど、よほど雨の強い日でなければ、窓はずっと開けっぱなしにしておいて」

「かしこまりました」

「これなら、今度は失敗しないかしら」

「……どういう意味ですか？」

「いいのよ。こっちの話。とにかく、よろしくお願いね。ああ、そうそう。それから窓を開けた時でも、リビングのカーテンはいつも閉めておいてちょうだい。プールを庭に出す時も、ガレージの陰に置いてね。裏のアパートからのぞく人がいて、困っているのよ……」